

ため池公園における利用者意識の季節による違いに関する研究

関西大学大学院工学研究科 学生員 ○衛藤貴朗
関西大学工学部土木工学科 正会員 三浦浩之
関西大学大学院工学研究科 正会員 和田安彦

1. はじめに

都市生活者にとって「水のある空間」が良好な生活環境を形成する上で、必要な空間であるという認識が広く認知されるようになってきた¹⁾。また、そのような空間の整備のためには、整備内容、方針に住民の意見を取り入れていくことが必要かつ重要となっている。そこで本研究では「水のある空間」として都市域に位置するため池公園において、アンケート調査によりため池公園施設に対する利用者の意識の把握を行った。ため池公園の姿は季節によって変化が生じ、それにより、利用者の水辺に対するとらえられ方が変わる可能性がある。そこで、夏季と冬季にそれぞれアンケート調査を実施し、季節の違いによる水辺に対する利用者の意識の違いを示した。

2. ため池公園利用者への意識調査概要

市街地にある I 池公園を研究対象とした。I 池公園は住宅地に囲まれた公園施設であり、運動や休息、コミュニケーションの行える場とし

表-1 回答者属性

	夏季(8月～9月)	冬季(11月)
男女	男性：53% 女性：47%	男性：56% 女性：44%
居住地域	市内：68% 市外：32%	市内：50% 市外：50%
年齢	10代：5% 20代：16% 30代：28% 40代：10% 50代：16% 60代：21%70代：4%	10代：4% 20代：30% 30代：29% 40代：10% 50代：11% 60代：14%70代：2%

て、また、冬季には毎年多くの水鳥が飛来することから、市外からも多くの利用者があり住民に親しまれている公園施設である。

表-2 季節の違いによる差

	差がなし	差があり
①公園利用	・利用目的	・利用頻度
②池の水に対するイメージ	・水質 ・アオコの発生目撃 ・魚の死骸の目撃	・水のおいしさ ・水量
③植物、生物に対する意識	・魚の数 ・野鳥の数 ・野鳥に対する意識	・樹木の数 ・草花の数
④環境保全に対する意識	・給餌活動禁止の認知	・給餌活動の禁止に対する賛否

回答者属性を表-1に示す。夏季と冬季では、居住地域と年齢に差が見られた。居住地域においては、夏季に比べ冬季は市外からの利用者の割合が増加していた。また、夏季と比べると冬季は20代の割合が増加し、高齢者の割合の減少が見られた。

3. 季節の変化による利用者意識の変化

ため池の姿は季節により変化し、それにより利用者の水辺に対する意識も変化すると考え、夏季と冬季のアンケート結果を比較した。比較の結果を表-2に示す。また、季節の違いにより変化のある項目を図-1、図-2に示す。夏季と冬季でアンケートの回答者属性に違いがあることから、比較に際しては属性項目ごとに比較を行い、ある一定の増減の傾向が見られた設問項目を季節の違いによる、利用者の意識や行動の変化であると定義した。

① 公園の利用状況

夏季に比べて冬季は「ほとんど毎日利用」と答えた回答者の割合が減り、「年に数回利用」と答えた回答者の割合が増えている。利用目的には変化の無かったことから、全体として夏季に比べて冬季は公園施設を利用しなくなると考えられる。

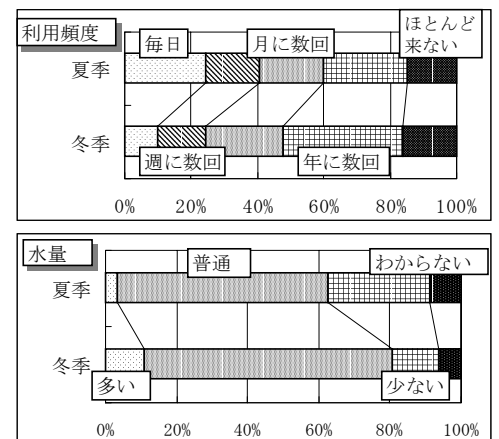


図-1 季節の違いによる変化①

キーワード：ため池、季節の変化、利用者意識

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL 06-6368-1121

②池の水に対するイメージ

水質に対する意識には変化が見られなかった。また、水質の悪化を感じさせる現象であるアオコの発生や、魚の死骸の目撃者割合にも同様に変化は無かった。一方、池水のにおい、水量に対する意識には変化が見られた。夏季に比べ冬季は池水のにおいを気にする利用者の割合が減り、水量を多く感じる利用者の割合が高くなっていった。

③植物、生物に対する意識

魚・水鳥の数、水鳥に対する意識といった水辺の生物に対する感じ方に対して変化は見られなかったが、樹木、草花といった植物に対しては、夏季に比べ冬季は数の多さを感じる割合が低くなった。

④給餌活動の禁止に対する意識について

I 池公園では、利用者による水鳥への給餌活動を水質悪化防止のため禁止しており、公園施設内の数箇所に禁止を訴える看板を設置している。しかし、冬季には多くの水鳥が飛来するため、利用者は水鳥とのふれ合いを求め頻繁に給餌活動を行っている。給餌活動が禁止されていることの賛否に関しては、「給餌活動の禁止に反対」と答えた利用者の割合が高くなった。これは多くの渡り鳥が飛来することがマスコミで取り上げられ、公園利用者による給餌活動風景が紙面等に掲載するため、利用者の給餌活動に対する意識影響したと考えられる。

4. 意識の違いの要因分析

給餌活動の禁止の賛否に対する意識の違いの理由として、上記で示した以外に、季節間による利用者の意識、行動の違いが影響を及ぼす可能性が考えられる。そこで、表-2 に示した差があった項目の給餌活動の禁止されていることの賛否への影響を見るために、給餌活動の禁止に対する賛否を目的要因とした数量化Ⅱ類による分析を行った。差の生じた項目の中で関連の強かった「利用目的」、「水のにおい」を目的要因とした。カテゴリースコアの算出結果を図-3 に示す。「利用頻度」では利用頻度が下がるにつれて、「池の水のにおい」ではにおいを気にしなくなるにつれて給餌活動の禁止に反対の傾向が強いことが明らかになった。上記で示したように、夏季に比べ冬季は利用頻度が低くなり、においを気にする利用者も減ったことから、利用頻度と水のにおいに対する意識の夏季と冬季での違いは、給餌活動の禁止に対する賛否と関連があることが明らかになった。

4. まとめ

夏季と冬季のため池公園施設における利用者意識、行動の比較を行い、その変化を示した。利用状況、水のにおい、水量、植物の数、給餌活動の禁止の賛否に対する意識に変化が見られた。公園内の状況が変わることが、利用者の環境保全に対する意識(給餌活動の禁止の賛否)に影響を及ぼす可能性があることが明らかになった。利用者の公園施設に対する意識や行動は季節によって変化する可能性があり、それらを正確に把握するためには、季節毎に調査を行うことが重要である。

【謝辞】 最後に本研究を行うにあたり、アンケートに協力していただいた住民の皆様方、ならびに調査にご協力頂いた研究室の方々に謝意を表します。
 【参考文献】 1)畔柳昭夫，渡邊英俊，都市の水辺と人間行動，p.50，1999。

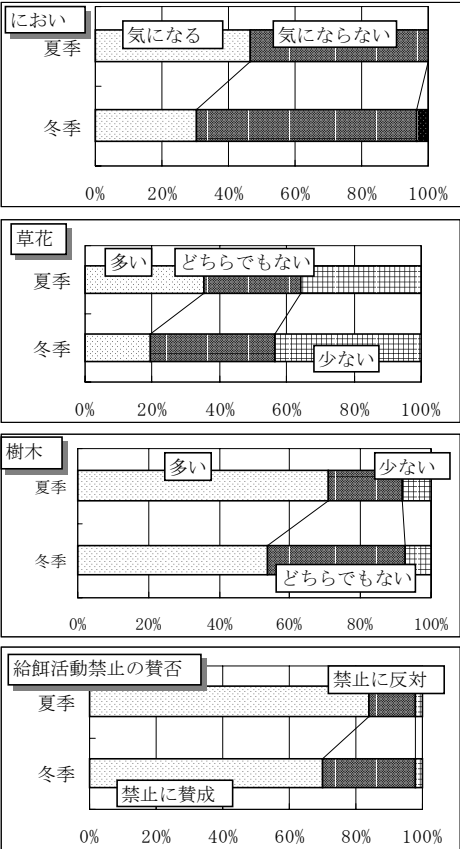


図-2 季節の違いによる変化②

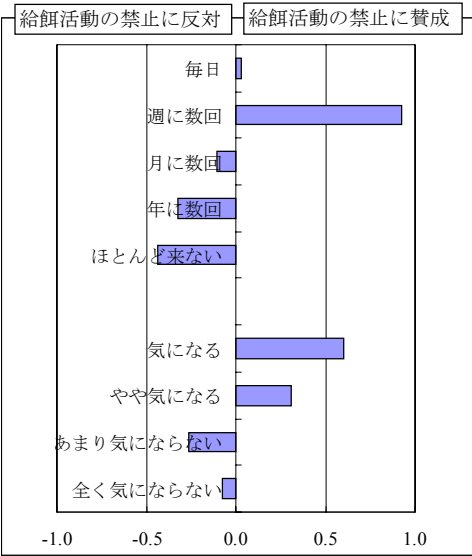


図-3 カテゴリースコアの分布